『ブータダーマラ・タントラ』における発話者
――仏教文献とシヴァ派文献との比較を通して――

文学研究科インド哲学仏教学専攻博士後期課程２年
藤井　　明

0. はじめに

*Bhūtaḍāmaramahātantrarāja*あるいは*Bhūtaḍāmaratantra*（以下『ブータダーマラ・タントラ』）は、近似する内容を備えるヒンドゥー教版と仏教版の両版が存在することから、両宗教間の関わりを考察する上で注目すべきタントラである[1]。

仏教版には、サンスクリット写本、チベット訳、漢訳が揃い[2]、ヒンドゥー教版はサンスクリット写本および、いくつかの刊本を利用できる[3]。この両版では、登場する諸尊格に違いがあるものの、説かれる内容、マントラなど多く共通する内容を含んでいる[4]。このように、異宗教間で類似するテキストであるこの両版からは、仏教とヒンドゥー教との宗教間の関わりを見ることができるだろう。また、仏教版の本タントラ中では、対告衆として大自在天が描かれ、大自在天の住居などを成就に適した場所として挙げるように[5]、大自在天信仰との関連も見ることができる。

ここで、各版について論じている先行研究を見ていこう。

仏教版の成立時期に関しては、Bhattacharyya[1930]の中で、①『サーダナマーラー』中の4つのブータダーマラサーダナの著者としてヴァイローチャナとトライローキヤヴァジュラが挙げられており、このヴァイローチャナをヴァイローチャナラクシタ[6]と比定できること[7]、そして②本文献中に描かれるディーナーラ金貨が、グプタ期の中期からインドで流通していた、Denariiの模倣のコイン名である[8]、という2点を主たる論拠として、このタントラが7世紀の初めのものであろうと推測されている。更に、ヒンドゥー版内で説かれるマンダラにおいて下位にヒンドゥー神が置かれていることや、同版内で多数の仏教用語が言及されていることなどを根拠として、仏教版がヒンドゥー版に先立つものであると結論付けている[9]。付け加えれば、このタントラの仏教版は、所作タントラの金剛部に属するものとされている[10]。

ヒンドゥー教版はシャイヴァ・タントラに配されている[11]。加えて、16-18世紀の間にVidyāraṇyaによって作られたとされる*Śrīvidyārṇavatantra*と、17世紀にKṛṣṇānanda Āgamavāgīśa

に編纂されたとされる*Tantrasāra*の中に当タントラが引用されていることがBühnemann[2000]において報告されている。また、Pal[1981]は「ダーマラはシャイヴァ・タントラとみなされる」と述べた後、先のĀgamavāgīśaが『ブータダーマラ・タントラ』より多く引用をしていることから、『ブータダーマラ・タントラ』は「16世紀までには権威付けられていた」としている。また「ヒンドゥーの*Bhūtaḍāmaratantra*は11から15世紀の間に構成されたに違いない」とも述べている[12]。しかしながら、この年代の推定方法は、「*Niṣpannayogāvalī*や*Sādhanamālā*といった仏教タントラに説かれるBhūtaḍāmaraが11世紀までには既に重要な金剛乗（vajrayāna）の神であった」[13]ということを前提として述べられている。即ち、仏教版の成立が先であるという前提による推定である。

以上のように、両版の研究で一貫して主張されているのは仏教版がヒンドゥー版に先行するということである。今回の論文では、この説が妥当であるかということを考察したい。この操作によって、タントラにおける仏教とヒンドゥー教の関わりの一端を明らかにすることが出来ると考えられる。その方法として、Bhattacharyya[1930]が、「仏教版が先行するものである」とする根拠として例示する中の一つである、ヒンドゥー版の中で「マハーデーヴァが菩薩と呼ばれている」[14]という一節を挙げよう。この記述に関して氏は一言するのみであり、仏教版との詳細な比較はなしていない。筆者は氏の扱っていたOriental Institute BarodaのManuscript Libraryの写本[15]を未見のため、Nepal National Archivesに保存される写本2本といくつかの刊本を基に考察を進めたい。

この考察の過程として、1.先の一節におけるヒンドゥー教、仏教両版の「発話者」に注目し、その共通点と相違点を挙げる。そして次に2.同箇所での‘bodhisatva’[16]という語が示す対象に注目して考察したい。

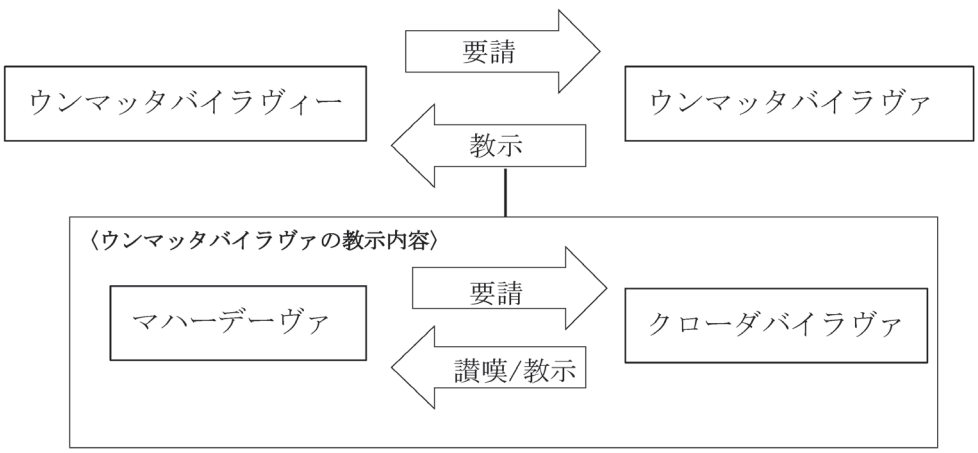
1. 両版における「発話者」

先ず、各々の特徴を示す前段階として、両版の先の記述箇所を対照して共通点と相違点を挙げていこう。今回の論文で利用した本文の一節に関しては、適宜論中で挙げるが、本論文末尾にも資料としてまとめて挙げた。

末尾に資料として挙げた部分は、忿怒尊（仏教版ではVajradharamahākrodhādhipati, 即ち金剛持または金剛手、ヒンドゥー教版ではKrodhabhairava）に対して、マハーデーヴァ（大天）が敬礼し、教えを請うという場面である。両版でのこの場面における情景描写と対話の内容は、散文と韻文という形式の違いや用いる語の異同はあるが、ほぼ同一のものであり、このタントラが近似していることは明らかである。

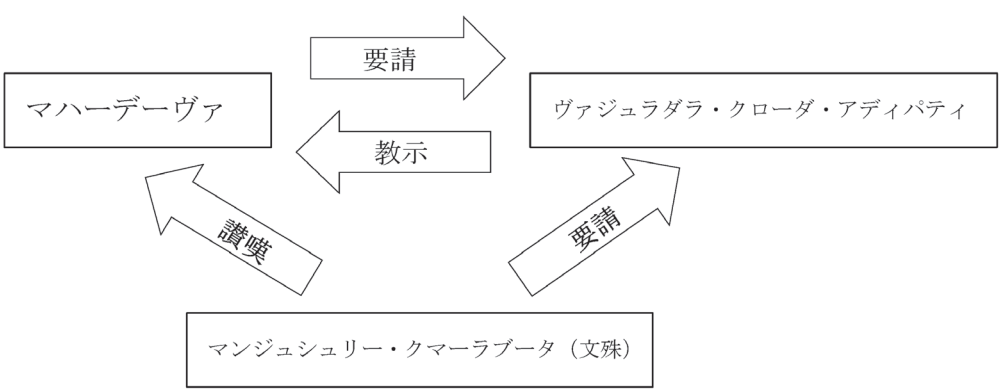
このような共通性の中でも特に興味深いのは、先にも述べた通りヒンドゥー教版の中で、マハーデーヴァに対して讃嘆の言葉「善哉（sādhu）」を与える場面において‘*bodhisatva mahādeva*’と述べられていることである。ヒンドゥー教の版におけるこの場面の状況として

は、ウンマッタバイラヴィーがウンマッタバイラヴァに対し、大マンダラの成就法を説くことを要請し、それに対しウンマッタバイラヴァが、クローダバイラヴァとマハーデーヴァの間での成就法に関する対話を説くというものである。即ち主としてその内容に関わっているのは四者である。(図1参照)



＜図1　ヒンドゥー教版『ブータダーマラ・タントラ』に登場する神格の相関図＞

では、仏教版でこの場面はどの様に説かれているのであろうか。仏教版でのこの場面は、梵蔵漢共にマハーデーヴァが金剛手に教示を請う場面である。そして、そのマハーデーヴァに「善哉（sādhu）」の言葉を発するのは文殊童子大菩薩（Mañjuśrīkumārabhūtamahābodhisatva）である。こちらは主たる話者が三者である。(図2参照)



＜図2　仏教版『ブータダーマラ・タントラ』に登場する諸尊の相関図＞

上記の2つの図からも分かるように、近似する内容を持つものの、登場する話者に変更が加えられ、ヒンドゥー教、仏教各々の教理に合わせられた形になっていると言えよう。当タントラはこのように、各々の文脈に即す形に変化を加えられているが、両宗教に重なる存在として、共通して登場するマハーデーヴァおよびkrodhaの語を備えるKrodhabhairava、そしてVajradharamahākrodhādhipatiという尊格を見ることができる。

ここでは両版において類似性を持つ一節を挙げ、その中での「主たる話者」を中心とした相違点を示し、当タントラが双方の教理に沿うような形に整えられた近似するものであることを指摘した。では、このような操作がなされた当タントラがどのような特徴を有し、どの様な方法を以て変容されているかを次に見ていこう。

2. bodhisatva が示す対象

前節と同様に、資料として末尾に挙げた場面を中心に、このタントラの特徴を見ていこう。ここでは、前節で一言したbodhisatvaという語を含む箇所から考察を加えてみる。この「菩薩」と漢訳される単語が果たして仏教文献のみに特有のものであるかはより調査が必要であるが、この問題とは別に、この単語が用いられている場所を比較することによって考察を進めていく。先に挙げた箇所では、ヒンドゥー教版、仏教版それぞれ2か所でbodhisatvaという語が用いられている。それは以下のものである。

①マハーデーヴァが、クローダバイラヴァあるいはヴァジュラダラに呼びかける場面
②マハーデーヴァの要請に対し「善哉」の語を与える場面

以上2点である。上記の①に関しては、仏教版ではマハーデーヴァが「[金剛持]大菩薩は…一切秘密のマンダラの成就に関するものを説いて下さい」と請う場面である。また、ヒンドゥー教版では、マハーデーヴァがクローダバイラヴァに対し「菩薩たるマハーカーラよ…成就[法]を語れ」と請うものである。

上記②に関しては上述①に続くものであり、仏教版では「文殊童子大菩薩は、ブータの主マハーデーヴァに称賛を与えた。『善哉善哉、マハーデーヴァよ。…』」という記述である。ヒンドゥー教版のここに対応する箇所には、写本間の記述に異なりを見ることができる。写本N1（本稿注3参照）では、*bodhisatva mahādeva sādhvīti*と説かれ、写本N2（本稿注3参照）では*bodhisatvo mahāprājñaḥ sādhu sādhv iti*と説かれ、そして刊本では*bodhisattvo mahādevaṃ sādhu sādhvīti*と説かれる[17]。即ち、この異なりは以下の通りである。

②-1　写本N1を採るならば、「菩薩よ、マハーデーヴァよ」となり、マハーデーヴァを菩薩として捉えている。
②-2　写本N2および刊本の記述を採るならば、「大いなる智を備える菩薩は」あるいは「菩薩はマハーデーヴァに」となり、「善哉」の語を与える者が菩薩であると捉えている[18]。

上記の②-1と②-2それぞれを仏教版の対応する箇所と再度見比べてみよう。

仏教版では

mañjuśrīkumārabhūto mahābodhisatvo bhūteśvaramahādevasya sādhukāram adāt // sādhu 2 mahādeva[19]

（文殊童子大菩薩は、ブータの主マハーデーヴァに称賛を与えた。「善哉、善哉。マハーデーヴァよ」）

と説かれている。

ヒンドゥー教版②-1では、

unmattabhairava uvāca // bodhisatva mahādeva sādhvīti pūjayet tataḥ //[20]

（ウンマッタバイラヴァは言った。「菩薩よ、マハーデーヴァよ。善哉」とそのように[クローダバイラヴァは]敬意を払うべきである）

と説かれており、文殊菩薩の発言がウンマッタバイラヴァによる発言に対応するようになっている。しかしながら、ここまでの話の流れでは、ウンマッタバイラヴィーの要請に対し、ウンマッタバイラヴァがマハーデーヴァとクローダバイラヴァの対話を説いており、この場面はその対話の途中である。そのため、ここでの唐突なウンマッタバイラヴァによる発言は不自然である。これは、先の節で述べたところの発話者の変化に由来するものだと考えられる。「発話者たる文殊菩薩の不在」即ち、「善哉」の言葉を発する菩薩を描けない故にbodhisatvaという語がMahādevaに結合しているのだと言えよう。この写本N1での混乱は、bodhisatvaという語がMahādevaに付加されていることである。

次にヒンドゥー教版②-2の場合であるが、称賛を与える者がbodhisatvaであることは仏教版と同様である。写本N2では、

bodhisatvo mahāprājñaḥ sādhu sādhv iti pūjayan /[21]

（大いなる智を備える菩薩は「善哉、善哉」と敬意を払って）

と説かれており、bodhisatva=Krodhabhairavaである。また、刊本Mishra[2016]では、

bodhisattvo mahādevaṃ sādhu sādhvīti pūjayan /[22]

（菩薩はマハーデーヴァに「善哉、善哉」と敬意を払って）

と説かれ、先と同様bodhisatva=Krodhabhairavaと考えられる。①でもクローダバイラヴァに対して「菩薩」の語が用いられているので、その使用対象が一致している。

仏教版で「菩薩」と呼ばれているのは金剛持菩薩と文殊菩薩である。また、上述したように、ヒンドゥー教版の②-2の場面においてはbodhisatva=Krodhabhairavaであり、更にこれを仏教版と対応させればbodhisatva=Krodhabhairava=Mañjuśrīkumārabhūtaという関係である。このKrodhabhairava=Mañjuśrīkumārabhūtaという図式は、既に「はじめに」で挙げたところの、当タントラの引用をしている*Tantrasāra*内に見ることが出来る。Pal[1981]は、*Tantrasāra*中に引用された*Bhairavatantra*および*Kukkuṭeśvaratantra*の一節を挙げて、MañjughoṣaがBhairavaと同一視されていることを指摘し[23]、MañjughoṣaがBhairavaとしてのシヴァ神と同一視されヒ

ンドゥーパンテオンに組み込まれたとしている[24]。この記述に依るならば、Mañjughoṣaと同一の尊格と考えられるMañjuśrīkumārabhūtaがKrodhabhairavaに置き換えられたのだと言うことが出来るであろう。

では、②-1の場合はどうであろうか。これはMañjuśrīkumārabhūtaを、同じBhairavaの語を持つUnmattabhairavaに置き換えた場合の形であろうと推測される。

これまで述べてきた両版の主たる話者を対照すれば以下のようになろう。

	ヒンドゥー教版	仏教版	
		写本N1との対応	写本N2、刊本との対応
1.要請者①	ウンマッタバイラヴィー	なし	なし
2.説示者①	ウンマッタバイラヴァ	マンジュシュリー	なし
3.要請者②	マハーデーヴァ	マハーデーヴァ	マハーデーヴァ
4.説示者②	クローダバイラヴァ	ヴァジュラダラ	ヴァジュラダラおよびマンジュシュリー

このように、写本間において、bodhisatvaという語がマハーデーヴァに付加される（写本N1）、もしくはクローダバイラヴァに付加される（写本N2、Mishra[2016]）、あるいはその話者に混乱が見られる原因として挙げられることは、元来仏教タントラで述べられていたMañjuśrīkumārabhūtaをBhairavaに置き換えたものの、bodhisatvaという語を残してしまったためである、ということである。

3. おわりに

以上のように、仏教、ヒンドゥー教両版で共通性を持つ箇所を挙げ、その類似点と相違点を挙げた。その文脈中におけるbodhisatvaという語を含む箇所について考察を加え、主として発話者という点から、その内容の変化について考察した。このタントラにおける内容の変化について扱う、あるいはこのタントラの成立の前後関係を考察するには、今回扱った内容では甚だ資料不足ではあるが、その端緒としては今回の内容はある程度有効であろう。即ち、Bhattacharyya[1930]が主張するところの「仏教版が先行する」という説は、「発話者の相違」に由来すると考えられるヒンドゥー版における「文章の混乱」という点から見ても妥当だと言い得るということである。

仮にヒンドゥー教版内における当該箇所の混乱が、仏教版の「文殊童子」という語を置き換えて利用し主たる話者を変えたことに基づくと考えても、なぜbodhisatvaという語を削らなかったのであろうか、という疑問もまた生じる。これについては今後の課題である。

「はじめに」でも述べたように、仏教版でも大自在天宮殿と漢訳されているエーカリンガに赴いて真言を唱えるという修法とその利益が説かれている。このような儀礼自体がヒンドゥー教的修法を借用したものであると考えることができる[25]。そのような儀礼内容を含む

仏教タントラを、ヒンドゥー教徒が有用と考え、逆輸入したということはあり得ることであり、当タントラはその一例である可能性もあるのである。

資料

≪凡例≫

〈仏教版〉

【サンスクリット】

A Catalog of Nepalese Manuscripts in the Asha Archives　A1: dp.No.3695 / cd.No.ASK_BL_07

Matsunami　T1: No.273

T2: No.274

吉崎 1981: 吉崎一美　1981「Bhūtaḍāmara 尊の諸文献」『印度学仏教学研究』58(2)

【チベット】

東北　D: No.747

大谷　P: No.404

'byung po 'dul ba zhes bya ba'i rgyud kyi rgyal po chen po

【漢】

大正蔵　No.1129『佛説金剛手菩薩降伏一切部多大教王經』

〈ヒンドゥー版〉

【サンスクリット】

NGMCP Catalogue　N1: Reel No. B134-12, Inventory No. 11976

N2: Reel No. B135-45, Inventory No. 11975

利用できる刊本　M: Mishra, G. R. 2016. *BHŪTA-ḌĀMARA TANTRA*, Chaukhamba Surbharati Prakashan.

C: Caṭṭopādhyāya R. M. 2011(2nd ed.). *Bhūtaḍāmaratantra*, Navabhārata Pāvaliśārsa(1st ed.の初版年は 1876 年である。ベンガル文字)

K: Khaṇḍelavāla, S. N. 2010. *Bhūtaḍāmaratantra; hindīvyākhyopetam*, Caukhambā surabhāratī prakāśan.

R: Rāya, K. K. 2008. *Bhūtaḍāmara tantram*, Prācya prakāśan.

U: Uttama, A. K. 2002. *Bhūtaḍāmaramahātantram*, Bhāratīya vidyā saṃsthāna.

＊各写本のロケーションに関しては、[　]内先頭に該当する写本の略号を付した。

一字欠の場合は+で表記した。

①【仏教版】

①-1　蔵訳

de nas dbang phyug chen po [D:245a4] lha chen po rig 'dzin bye ba du mas yongs su bskor te / lha'i bu mo du ma dang / gnod sbyin dang / klu dang /[26] mi'am ci dang / lto 'phye chen po khri phrag brgya stong du ma dang lhan cig tu 'khor gyi dkyil 'khor [P:39b8] chen po der dpal rdo rje 'chang khro bo'i bdag po chen po la lan gsum [D:245a5] bskor ba[27] byas te / zhabs la mgo bos phyag 'tshal nas bcom ldan 'das la 'di skad ces gsol to // byang chub sems dpa' sems dpa' chen po rnams la mi phyed [P:40a1] par bstan pa / khams gsum pa'i rgyal po chen po 'byung po dang / klu dang /[28] gnod sbyin dang /[29] [D:245a6] rig 'dzin rnams 'jig par byed pa / bgegs thams cad 'joms pa / sdug bsngal ba dang / nyon mongs pa thams [P:40a2] cad sel ba / gdon thams cad dang / ro langs dang /[30] lus srul po rnams gsod pa[31] / dkyil 'khor gsang chen thams cad grub par[32] [D:245a7] byed pa bshad du gsol / de nas 'khor gyi dkyil 'khor der gnas pa'i byang chub sems [P:40a3] dpa' sems dpa' chen[33] po 'jam dpal gzhon nur gyur pas 'byung po'i dbang phyug lha chen po la legs so zhes bya ba byin te[34] legs so legs so // lha chen po ma 'ongs pa'i [D:245b1] dus na 'dzam bu'i gling gi mi rnams la [P:40a4] phan pa'i don du 'byung po thams cad dang / klu dang /[35] gnod sbyin dang / mi'am ci rnams bran mor sgrub pa'i thabs khro bo'i bdag po chen pos gsungs shig /

（和訳：それから、大自在たる大天は、一億ほどたくさんの持明者によって普く囲繞されて、多くの天女、ヤクシャ、ナーガ、キンナラ、マホーラガ［などの］10億ほどのものと共に、集会のその大衆において、聖金剛持たる大忿怒主を右遶三匝して、足元に額づいて、世尊にこう請うたのである。「菩薩摩訶薩たちに不壊のものを説いて下さい。三界の大王よ。ブータとナーガとヤクシャと持明者たちを破壊し、一切魔を滅し、苦と一切煩悩を断じ、一切魔鬼と、ヴェーターラと、カタプータナたちを殺す、一切を成就する、大いなる秘密のマンダラを説いて下さい」と。それから、その集会の集まりに居る菩薩摩訶薩たる文殊師利は、ブータの主たる大天に「善哉」という言葉を与えて［次のように言った］、「善哉、善哉、大天よ。未来時に、瞻部州の人々への利益のために、一切ブータと、ナーガと、ヤクシャと、キンナラたちを使いとするための成就法を、大忿怒主は説け」と。）

①-2　漢訳

爾時有大自在天。與無數俱胝天人圍繞。復有無數天女龍神緊曩羅摩睺羅伽等在大會中。爾時大自在天。即從座起五體投地。禮金剛手大忿怒主足。右繞三匝白菩薩言。復爲我説調伏三界一切部多。及天龍藥叉天人衆等。令生大怖除諸魔障。能殺一切星曜及吠多拏布怛曩。成就祕密曼拏囉法。爾時文殊師利菩薩讚言。善哉善哉大自在天。汝能利益未來法末之時。閻浮提内一切衆生。能問菩薩調伏三界諸悪部多。天龍夜叉緊那羅等。成就祕密

大曼拏羅法。時金剛手菩薩。即爲説此曼拏羅成就法。[36]

①-3　サンスクリット

[T1:14b7] atha maheśvaro[37] mahādevo[38] 'nekavidyādhara[39] (42-ceṭiparivṛtān[40] (41-sapa-[A1:23b3] rivārān-41)) anekāpsarayakṣanāgakinnaramahoragān-42)) anekaniyutaśata-[T2:16b4]sahasrān[43] tasya [A1:23b4] parṣa-[T1:15a1]tmaṇḍale[44] śrīvajradharamahākrodhādhipatim[45] tripradakṣiṇīkṛtya[46] pādau śirasā[47] vanditvā [A1:23b5] bhagavantam etad avocat[48] //[49]

bhā-[T2:16b5]ṣate [T1:15a2] mahābodhisatvo 'pratihataśāsanasya[50] traidhātukama-[A1:24a1] hārājasya[51] sarvabhūtanāgayakṣavidyādharānāṃ[52] bhayaṅkarasya[53] sarvavi-[T1:15a3] ghnavināyakaduḥkhakle-[A1:24a2]śa-[T2:17a1]vināśanasya[54] sarvagrahavetāḍakaṭapūṭanādimār aṇasya[55] sarvarahasyamaṇḍalasādhanasya[56] [A1:24a3] //[57]

atha parṣatma-[T1:15a4]ṇḍale[58] mañjuśrīkumārabhūto[59] mahābodhisatvo[60] bhūteśvaramahā-[T2:17a2]devasya[61] sā-[A1:24a4]dhukāram[62] adāt //[63] sādhu 2[64] mahādeva[65] paścime[66] kāle[67] paścime[68] samaye jāmbudvīpakā-[T1:15a5]nāṃ[69] (70-manu-[A1:24a5]ṣyāṇāṃ hitārthāya-70)) sarvabhūtanāgayakṣa-[T2:17a3]kinnaraceṭisādhanaṃ[71] vaktu[72] mahākrodhādhipatimaṇḍa-[A1:24b1]laṃ[73] //[74]

（和訳：さて、大自在たる大天は、その衆会の集まりにおいて、たくさんの持明者、下女に囲まれ、多くのアプサラス、ヤクシャ、ナーガ、キンナラ、マホーラガたち、一億ほど多くの従者を伴った、聖金剛持大忿怒主を右遶三匝して、［金剛持の］両足に頭で敬礼して、世尊にこう言った。「大菩薩は、不壊の教えの、三界の大王の、一切ブータ、ナーガ、ヤクシャ、持明者たちの、恐ろしき、一切障礙、ヴィナーヤカ、苦、煩悩を破壊する、一切魔鬼、ヴェーターラ、カタプータナなどを殺害する、一切秘密のマンダラの成就に関するものを説いて下さい」と。それから、衆会の集まりにおいて、文殊童子大菩薩は、ブータの主マハーデーヴァに称賛を与えた。「善哉、善哉。マハーデーヴァよ。[金剛持は]後の世、後の時代における、贍部州の人々の利益のために、一切ブータ、ナーガ、ヤクシャ、キンナラを使いとする成就[法]である、大忿怒主の曼荼羅を説け」と。）

②【ヒンドゥー教版】

unmattabhairavī[75] uvāca //[76]

surāsurajagadvaṃdya[77] jagatāmupakāraka[78] /[79]

śrīmahāmaṇḍa-[N1:14b7]laṃ[80] brūhi sarvasiddhipradāyakaṃ[81] //[82]

(83-unmattabhairava uvāca /-83))

vidyādharo 'psaro[84] yakṣa-[N2:8b7]pretagaṃdharvakinnaraiḥ[85] //[86]

mahoragaiḥ[87] parivṛto (88-mahādevas trilocanaḥ-88)) //[89]

krodhaṃ[90] [N1:15a1] pradakṣiṇīkṛtya namaskṛtya punaḥ punaḥ //[91]

pādau [N2:8b8] śiro nidhāyātha[92] bhāṣate kroḍhabhairavaṃ[93] //[94]

(95-bodhisatvamahākāla duṣṭagra-[N1:15a2]havimardaka-95) //[96]

kaṭapūtanavetālakleśavighnavighātaka[97] //[98]

(99-prasīda devadeveśasaṃsārārṇavatāraka-99) //[100]

paścime samaye kā-[N1:15a3]le[101] jaṃbūdvīpe[102] kalau yuge //[103]

martyānām upakārāya[104] duṣṭadurjanavigrahaṃ[105] //[106]

bhūtinīyakṣiṇīnā-[N2:8b10]gakanyakāsādhanaṃ[107] vada // //[108]

[109] bodhisatvo[110] mahādevaṃ[111] (112-sādhu sādhv iti-112) pūjayan[113]//[114]

（和訳：ウンマッタバイラヴィーは言った。「神々と諸アスラと世界の称賛を受ける者よ。諸世界の利益を与える者よ。一切成就を与える聖大マンダラを語れ」と。ウンマッタバイラヴァは言った。「［この様なことがあった。］天女（ウンマッタバイラヴィー）よ。ヤクシャ、プレータ、ガンダルヴァ、キンナラたちによって、マホーラガたちによって囲まれた三眼を持つ持明者マハーデーヴァ（大天）は、クローダ［バイラヴァ］を右遶して、何度も敬礼し、［彼の］両足に頭を置いてから、クローダバイラヴァに言うのである。「菩薩たるマハーカーラよ。悪を捕え破壊する者よ。カタプータナやヴェーターラによる苦痛や障礙の撃退者よ。神々の中の神の主である輪廻の海の救済者よ。どうか、後のカリユガの時代、贍部州における人々の利益のために、悪と悪人と離れる［そのような］、ブーティニー（ブータ女）、ヤクシニー（ヤクシャ女）、ナーガカンニャー（蛇の少女）の成就［法］を語れ」と。［クローダバイラヴァ］菩薩はマハーデーヴァに「善哉善哉」と敬意を払って…後略…）

---

[1] Bhattacharyya [1930] および神代 [1988]（p.214）においてこの文献に関する考察がなされている。また、Bhattacharyya [1930] を引いた Goudriaan[1981]（pp.118-119）においても仏教版とヒンドゥー版の存在が言及されている。また、Goudriaan[1981] の注（p.119, 注 31）で挙げられている R.M.Chattopadhyaya によるベンガル文字でのテキストがあり（Caṭṭopādhyāya[2011]）、こちらはヒンドゥー版のものである。ヒンドゥー版に関してはこの他に、英訳を含む Mishra[2016] が近年出版されたが、そのテキストの底本となったもの（写本など）に関しては言及されていない。また、英訳を含む Rai[2004] のテキストは、その冒頭部分のストーリーやマントラはこのタントラと近似するが、その後半部分は様相を異にしており、別の文献である。この本の preface において上記のベンガル文字のテキストが挙げられている（Rai[2004], p. iii）。

また、この文献の諸写本に関しては塚本 [1989]（pp.146-147）に挙げられているが、その中にはヒンドゥー版のものも混在している。加えて、Bühnemann[1999] は仏教タントラとヒンドゥータント

ラ間の関係性を知る上での Bhūtaḍāmara の重要性を述べている（p.304）。

[2] 仏教版で利用したものは以下のものである。

漢訳：大正 No.1129『佛説金剛手菩薩降伏一切部多大教王經』

蔵訳：東北 No.747, 大谷 No.404

サンスクリット写本：筆者が現在見ることが出来るのは以下の 3 本である。

A Catalog of Nepalese Manuscripts in the Asha Archives, dp.No.3695 / cd.No.ASK_BL_07（以下 A1）

Matsunami　No.273（以下 T1）

No.274（以下 T2）

校訂テキストなどの刊本は未だ発表されていない。今回扱った箇所に関しては吉崎 [1981] がテキストを挙げているが、このテキストでは Asha Archives の写本には触れていないため、これを加えて今回扱っている。

[3] ヒンドゥー教版で利用した写本、利用できる刊本は以下のものである。

写本：NGMCP Catalogue　Reel No. B134-12, Inventory No. 11976（以下 N1）

Reel No. B135-45, Inventory No. 11975（以下 N2）

刊本：Mishra, G. R. 2016. *BHŪTA-ḌĀMARA TANTRA*, Chaukhamba Surbharati Prakashan.（以下 M）

Caṭṭopādhyāya R. M. 2011（2nd ed.）. *Bhūtaḍāmaratantra*, Navabhārata Pāvaliśārsa（1st ed.1876）

Khaṇḍelavāla, S. N. 2010. *Bhūtaḍāmaratantra; hindīvyākhyopetam*, Caukhambā surabhāratī prakāśan.

Rāya, K. K. 2008. *Bhūtaḍāmara tantram*, Prācya prakāśan.

Uttama, A. K. 2002. *Bhūtaḍāmaramahātantram*, Bhāratīya vidyā saṃsthāna.

[4] 筆者が利用することの出来るヒンドゥー教版の写本では、仏教版に説かれるマントラに対応する箇所に直接マントラは記されてはいない。これは、当タントラにおいてマントラが暗号化されていることに起因するものである（Bühnemann[2000], p.28, pp.40-42）。しかしながら、Mishra[2016] において、そのマントラが記されている。そのマントラは多く仏教版の該当箇所のマントラにほぼ一致する。例えば、仏教版では　*oṃ vajrajvāle hana 2 sarvvabhūtān huṃ phaṭ*（A1:2a1, T1:1a6, T2:1a5）と示されるマントラが、ヒンドゥー版写本では記されない（N1:2b2, N2:2a3）が、刊本の対応する箇所には *oṃ vajrajvālena han han sravabhūtān huṃ phaṭ*（Mishra[2016], p.6）というマントラが挙げられている。

[5] 漢訳では、「復次に夜分中に於て、大自在天宮殿中に往きて、眞言を誦すること一千遍せよ」（551c25-551c26）となっている。蔵訳では *mtshan mo ling ga gcig par song ste stong phrag gcig bzlas na*（D:244a1-244a2, P:38b4）と説かれている。仏教版の写本では ekaliṅga と記されている（A1:19b3-19b4, T1:12b3-12b4, T2:14a4-14a5）。ヒンドゥー教版では、記述が一定していない。例えば N1 では

ekaliṃ（N1:13a5）、N2 では ekaligaṃ（N2:7b11）、刊本 Mishra[2016] では ekaliṅkaṃ（p.55）である。しかしながら Caṭṭopādhyāya[2011] では ekaliṅgaṃ（p.28）、Rāya[2008]（p.29）、Khaṇḍelavāla[2010]（p.27）、Uttama[2002]（p.34）でも同様である。仏教版との対応関係から考えても、ここは ekaliṅgaṃ が正しいであろう。

[6] このヴァイローチャナに関して、Bhattacharyya [1928] でも Vairocana と Vairocana Rakṣita を同一人物として扱い、8 世紀に活躍した者と見ている（pp.CXX-CXXi）。Bhattacharyya [1928] はその注に Bose [2015] を挙げている。この Bose [2015] 中では Vairocana Rakṣita をヴィクラマシーラの僧だとしており、またインドの人間だと考えているようである（Bose [2015]、pp.40-46）。斉藤 [2001] は「Vairocanarakṣita は *Blue Annals* および Bu ston の仏教史のなかの記述、またチベット大蔵経に収録されている、かれの翻訳作品に付されているコロフォンなどから、Khri sroṅ lde btsan（西暦 742-797 年）の在世に活動したチベット人翻訳官であろうと推測される」としている（p.122）。プトゥンの仏教史においては、二つの説を挙げる中で「パコルのベローチャナ」と「パコルのベローチャナ・ラクシタ」と述べられており（芳村 [1951]、pp.33-34 および Obermiller[1932], p.190）、ここからは Vairocana と Vairocana Rakṣita が同一人物であると考えられる。Vairocana と Vairocana Rakṣita が同一人物であるとすれば、Bhattacharyya [1928] の言うように、『サーダナマーラー』中のブータダーマラサーダナの Vairocana という人物から『ブータダーマラ・タントラ』の年代は推定されるが、これを結論付けるには更なる調査が必要とされるであろう。

[7] Bhattacharyya [1930], p.353

[8] Bhattacharyya [1930], p.356

この金貨に関する記述は、確かに当文献中に散見される。一例を挙げれば、ヒンドゥー教版では「[行者に]1000 ディーナーラを授けるのである」（N1:6b5, N2:4a7, M:p.24）という記述がある。この部分は、仏教版では「[行者に] ディーナーナ（ディナーラであろう）金貨を与えるのである」（A1:10b1, T1:7a2, T2:8a1, D:241a3, P:35b4, 大正 1129:551c25-552a3）である。

このディーナーラに関しては『十王子物語』（7C 頃）中にも「そして私は一万六千ディーナーラ（金貨）を勝ち取り」（田中 [1966]、p.83）と出ている。また『ターラナータ仏教史』中にも「黄金デイナラ（Dinara）を施與し」（寺本 [1974]、pp.300-301。英訳は Chattopadhyaya[2010] の p.280。蔵文は Schiefner[1963] の p.169）と出る。同様に、「各黄金デイーナーラ（Dīnāra）を施し」（寺本 [1974]、p.358。英訳は Chattopadhyaya[2010] の p.334。蔵文は Schiefner[1963] の p.202）とも記されている。前者は Rāhulabhadra（Saraha）に関する記述の中で述べられているものであり、後者は Bhogasubāla 王、Candrasena 王そして Kṣemaṅkarasiṃha（Śaṃkarasiṃha?）王の三王が施しを行ったという記述である。これらディーナーラという記述から当タントラの成立年代を推定するには、これら記述を含めた他文献に現れるディーナーラの記述を更に調べる必要があろう。なお、漢訳は法天によってなされたとされ、大中祥符 8 年（1015 年）に完成したと考えられる『大中祥符法寶録』巻八の中に「[淳化] 五年正月…金剛手菩薩降伏一切部多大教王等經三部…」（中華大蔵経 No.1675）とあり、

これによれば当タントラは淳化五年（994 年）の翻訳である（武内 [1976]、p.45 および横超 [1935]、p.294 参照）。この記述に従えば、当タントラの下限は 994 年と言えるであろう。

[9] Bhattacharyya [1930], pp.365-366

[10] ツォンカパによれば「金剛部の主に属するタントラ」に分類される。また、「これらが [金剛] 部の主に属するタントラのうち、主なるもので、なお多くの雑多な [タントラ] がいっしょに翻訳されている」（高田 [1978]、pp.220-222）と出ていることから考えれば、多く利用され重要視されていた可能性を持つタントラであろう。

[11] NGMCP Online Catalogue 参照（URL は参考文献表に挙げた）

また、*Bījanighaṇṭu* というテキストは当タントラに依って作成されたとされる（Goudriaan[1981], p.161 および Benerji[2007], p.61）。テキストに関しては、Rai[2005], pp.40-51 を参照。

[12] Pal[1981], p.13 および p.32 注 8

[13] Pal[1981], p.32 注 8

[14] Bhattacharyya [1930], p.366

[15] Nambiyar[1950], p.1368, 1462

[16] 刊本では bodhisattva と記されるが、各写本では bodhisatva と記述されている。そのため、本論文では bodhisatva の語を用いる。

[17] Mishra[2016], p.63。この刊本の資料的根源がどこにあるかは記されていない。

[18] 注 1 で挙げたベンガル文字での刊本も *bodhisatvo mahādevaṃ* の記述である（Caṭṭopādhyāya[2011], p.32）。また他の刊本の Uttama[2002]（p.39）および Khaṇḍelavāla[2010]（p.31）でも同様である。一方、Rāya[2008]（p.34）では、*bodhisatvo mahādeva* である。

[19] A1:24a3-24a4, T1:15a4, T2:17a1-17a2

[20] N1:15a4

[21] N2:8b10

Bhandarkar Oriental Research Institute に保管されている写本カタログ（Sharma[1976] 参照）中の No.295 にも同名のタントラを見ることが出来る。筆者はこの写本を手にすることができたが、今回の論文においては部分的に利用するに留めた。確認したところ、この写本はヒンドゥー版であり、本論中の当該箇所の記述は写本 N2 と一致する。

[22] Mishra[2016], p.63

[23] Pal[1981], p.103

[24] Pal[1981], p.104

Bhairava と文殊の関連ではないが、シヴァ教タントラが文殊によって説かれたとされる『文殊師利根本儀軌経』における記述が、Sanderson[2009]（p.130）および種村 [2013]（p.79）において述べられている。

[25] ヴィンテルニッツが「おそらく仏教のタントラは、シヴァ派のタントラの影響のもとに七世紀

あるいは八世紀になって初めて存在するようになり」（ヴィンテルニッツ [1978]、p.301）と述べるところの一例としても当タントラを見ることができよう。

[26] P: omit.

[27] D: pa

[28] P: omit.

[29] D: omit.

[30] P: omit.

[31] P: ba

[32] P: bar

[33] D: dpa+ +en

[34] P: te /

[35] P: omit.

[36] 大正 No.1129: 552b17-552b28

[37] T1: -ra

[38] T1: māhādevā

[39] T1: anekavidyādhana

[40] A1,T1: -tāṃ

[41] T2: omit.

[42] A1: -yaja-; T1: yakṣanāgakinnaramahoragān; T2: -anekāpsavān-; 吉崎 1981:-ceṭiparivṛtān anekāpsarān-

[43] T1: -niyutasatasahaśrān; T2: ekaniyutasatasahasra

[44] T1: parṣamaṇḍalaṃ; T2: para-

[45] A1: -pates

[46] A1: -daji-; 吉崎 1981:trir pradakṣiṇīkṛtya

[47] T1: -śā

[48] A1: -cata

[49] T1,T2: /

[50] T1: -apratihatasāsanasya

[51] T1: -māhā-

[52] A1: sarvvabhūtanāgayaja-; T1: -dharāṇāṃ; T2: sarvva-dhara; 吉崎 1981: sarva-dhara-

[53] T1: bhayakara-

[54] A1: sarvva-; T1: -vināsa-; T2: sarvva- śanāśanasya /

[55] A1: sarvva-vetāḍu-; T1: -pūtanāgādimāranasya; T2: sarvva-katapūtanamāra-

[56] A1: sarvva-sādhanaṃsya; T2: maṇḍalarahasyaṃ sarvva-

[57] T1,T2: /

[58] T1: -ṣamaṇḍale; T2: pra-

[59] A1: -kumālabhūtena; T1: -bhūtena; T2, 吉崎 1981: -śrīḥ-

[60] A1: -vena; T1: bhodhisatvona

[61] A1: -maho-; T1: -māhādeva

[62] T1: -sādhakām

[63] T1,T2: omit.

[64] T2: sādhu

[65] T1: mā-

[66] T1,T2: -ma

[67] A1: kale

[68] T1,T2: -ma

[69] T1: -dvipakānā; T2: -dīpakā

[70] A1,T1: -ṣyānāhitārthāya

[71] A1: sarvva-yajakinnaravetisādhana; T1: -cetisādhana; T2: sarvva-

[72] A1: vaktuṃ; T2: vadatu

[73] A1: -patamaṇḍaraṃ; T1: -lamudrāvidhisādhanaṃ vi-[T1:15a6]staramantra idaṃ; T2: -lamudrāvidhisādhan avistaratantraḥ; 吉崎 1981: mahākrodhādhipati maṇḍalamudrāvidhisādhanavistaratantraḥ

[74] T1: // //; T2: // 7 //

[75] N1: -va; N2: bhairavy

[76] N2: /

[77] N2: surarāja-[N2:8b6]jagadvaṃdya; M: surāsurajagadvandya

[78] N1: -kā

[79] N1: //

[80] N2: mahāmaṇḍalakaṃ

[81] N1: sarvva-; N2: -siddhividhāyakaṃ; M: -kam

[82] N2: /; M: // 1 //

[83] N1, M: omit.

ここはウンマッタバイラヴィーとウンマッタバイラヴァの間での対話であるため、この文は必要であろう。

[84] N1: -ropsaro; N2: -rāpsaro

[85] N2: -kiṃnarāḥ; M: -gandharva-

[86] M: /

[87] N1: -gai

[88] N1: mahādevātrilocanaṃ

[89] N2, M: /

[90] N1: -ḍhaṃ

[91] N2, M: /

[92] M: vidhāyātha

[93] N2: krodhabhūpatiṃ; M: krodhabhūpatim

[94] N2, M: /

[95] N1: -marddaka; M: krodhīśa tvaṃ mahābhūtaduṣṭagrahavimardaka

[96] N2, M: /

[97] N1: kaṭapuṭenavetālakleśavighnavighātakaḥ; N2: kuṭhabhūtanivetālasarvagrahavighā-[N2:8b9]taka

[98] N2, M: /

[99] N1: -kaḥ; N2: omit.

[100] N2: omit.; M: /

[101] M: prāpte

[102] M: jambūdvīpe

[103] N2,M: /

[104] M: upakārārthaṃ

[105] N2: -nigrahaṃ; M: -nigraham

[106] M: /

[107] N1: -yakṣanī-

[108] N2,M: /

[109] N1: add. unmattabhairava uvāca //

刊本ではここは「聖クローダバイラヴァは言った」とされている。ここまでの話の流れでは、ウンマッタバイラヴィーの要請に対し、ウンマッタバイラヴァがマハーデーヴァとクローダバイラヴァの対話を説いている、という形式が採られていると考えられる。そのため、ここでのウンマッタバイラヴァによる発言は不自然であり、刊本の翻訳から考えれば「聖クローダバイラヴァが [マハーデーヴァに] 言った」が自然であろう。

[110] N1: bodhisatva; M: bodhisattvo

[111] N1: mahādeva; N2: mahāprājñaḥ

[112] N1: sādhvīti; M: sādhu sādhvīti

[113] N1: pūjayet tataḥ

[114] N2, M: /

参考文献

ヴィンテルニッツ著、中野義照訳　1978『仏教文献―インド文献史―』、日本印度学会

横超慧日　1935「新出金版蔵経を見て」『東方学報・東京』5号続編、東方文化学院東京研究所

齋藤直樹　2001「Lo tsā ba（翻訳者）Vairocanarakṣita―skad gsar bcad（語改定）以前の翻訳の特徴―」『日本仏教学会年報』66:121-132

高田仁覚　1978『インド・チベット真言密教の研究』、密教学術振興会

武内孝善　1976「宋代翻訳経典の特色について」『密教文化』113号、高野山出版社

田中於菟弥、指田清剛訳　1966『十王子物語』、平凡社

種村隆元　2013「密教とシヴァ教」『大乗仏教のアジア』シリーズ大乗仏教第十巻、春秋社

塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文編著　1989『梵語仏典の研究　Ⅳ 密教経典篇』、平楽寺書店

寺本婉雄訳　1974『ターラナータ印度佛教史』、国書刊行会

バッタチャリヤ著、神代峻通訳　1988『インド密教学序説』、東洋書院

松濤誠廉　1965『東京大学図書館所蔵梵文寫本目録』、鈴木学術財団

吉崎一美　1981「Bhūtaḍāmara尊の諸文献」『印度学仏教学研究』58（2）: 85-92

芳村修基　1951「ブトンのチベット仏教史」『仏教学研究』6:1-52

Benerji, S. C. 2007. *A Companion to Tantra*, Abhinav Publications. Delhi.

Bhattacharya, B.（edit.）1928. *Sādhanamālā Vol. II*, Oriental Institute, Baroda.

Bhattacharyya, B. 1930. “THE CULT OF BHŪTAḌĂMARA” , *Proceedings and Transactions of The Sixth All-India Oriental Conference*, The Bihar and Orissa Research Society.

Bose, P. 2015. *Indian Teachers of Buddhist Universities*, Facsimile Publisher, Delhi. reprint（1st ed.1923, Theosophical Publishing House, Madras）

Bühnemann, G. 1999. “Buddhist Deities and Mantras in the Hindu Tantras: I The Tantrasārasaṃgraha and the Īśānaśivagurudevapaddhati” , *Indo-Iranian Journal, volume 42, Issue 4*, Kluwer Academic Publishers.

Bühnemann, G. 2000. “Buddhist Deities and Mantras in the Hindu Tantras: Ⅱ The Śrīvidyārṇavatantra and the Tantrasāra” , *Indo-Iranian Journal, volume 43, Issue 1*, Kluwer Academic Publishers

Caṭṭopādhyāya, R. M. 2011. *Bhūtaḍāmaratantra*, Navabhārata Pāvaliśārsa. Kolkata. 2nd ed（ 1st ed. 1876）

Chattopadhyaya, L. C.A.（transl.）2010. *Tāranātha’s History of Buddhism in India*, Motilal Banarasidass Publishers. Delhi.（ 1st ed. 1970）

Goudriaan, T. and Gupta, S. 1981. *Hindu Tantric and Śākta Literature*, Otto Harrassowitz. Wiesbaden.

Khaṇḍelavāla, S. N. 2010. *Bhūtaḍāmaratantra; hindīvyākhyopetam*, Caukhambā surabhāratī prakāśan. Varanasi.

Krishnanand Agamavagish（edit. Ram Kumar Rai）. 1985. *Brihat Tantrasara*. Prachya Prakashan. Varanasi.

Mishra, G. R. 2016. *BHŪTA-ḌĀMARA TANTRA*, Chaukhamba Surbharati Prakashan. Varanasi.

Nambiyar, Raghavan. 1950. *An Alphabetical list of Manuscripts in the Oriental Institute Baroda vol.Ⅱ* ,

Oriental Institute Baroda.

NGMCP Online Catalogue（http://catalogue.ngmcp.uni-hamburg.de/wiki/Main_Page）

Obermiller, E. 1932. *The History of Buddhism in India and Tibet by Bu-ston*, Heidelberg.

Pal, P. 1981. *Hindu religion and iconology according to the Tantrasāra*, Vichitra Press. Los Angeles.

Rai, R. K. 2004. *Damara Tantra; Text in Nagari Script an English Translation*, Prachya Prakashan. Varanasi.

Rai, R. K. 2005. *Dictionaries of Tantra Śāstra*, Prachya Prakashan. Varanasi.

Rāya, K. K. 2008. *Bhūtaḍāmara tantram*, Prācya prakāśan. Varanasi.

Sanderson, A. 2009. "The Śaiva Age— The Rise and Dominance of Śaivism During the Early Medieval Period—"（ed. Shingo Einoo, *Genesis and Development of Tantrism*, Institute of Oriental Culture）

Schiefner, A. 1963. *復刊叢書2 Tāranāthae de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione*, 鈴木学術財団（1st ed. 1868）.

Sharma, H. D. 1976. *Descriptive Catalogue of the Government Collections of Manuscripts, deposited at the Bhandarkar Oriental Research Institute Vol.XVI: Part II TANTRA*, Bhandarkar Oriental Research Institute. Poona.

Uttama, A. K. 2002. *Bhūtaḍāmaramahātantram*, Bhāratīya vidyā saṃsthāna. Varanasi.

The speakers in *Bhūtaḍāmaratantra* —through comparison of the Hindu tantra and the Buddhist tantra—

FUJII, Akira

Bhūtaḍāmaramahātantrarāja and *Bhūtaḍāmaratantra* are tantras that need to be noticed because both have similar contents in two versions, *viz*, the Hindu version and the Buddhist version.
The Buddhist version has some Sanskrit manuscripts, a Tibetan translation and a Chinese translation, and the Hindu version has some Sanskrit manuscripts and some printed books. In these two versions, although there is a difference in the described deities, much common content — descriptions, mantras etc.— is included.

Thus, we may be able to recognize the relationship between Buddhism and Hinduism in these similar versions. We can also find that the Buddhist version indicates the *ekaliṅga* as a suitable place to accomplish some rituals. From this fact, we notice the connection to the cult of Maheśvara (Śiva) in this tantra.

Regarding the order of appearance, based on two main reasons, Bhattacharyya[1930] argues that the Buddhist version came before the Hindu version.

The Hindu version is placed in the Śaiva tantras. Pal[1981] says, “Thus, in all probability, the Hindu *Bhūtaḍāmaratantra* must have been composed sometime between the eleventh and the fifteenth century,” with a precondition that the Buddhist version came before the Hindu version.

As above, it is a common argument that the Buddhist version precedes the Hindu version. In this paper, I aim to examine whether that argument is correct. In this research process, I will focus on the description “Mahādeva is addressed as a Bodhisattva,” which Bhattacharyya[1930] gives as an example to prove his argument. Although he mentions this description, he doesn’t go into any detail about it in his article.

I will particularly focus on the following two points: 1. the commonality and dissimilarity of the speakers in the Buddhist version and the Hindu version; 2. the subject of the word *bodhisatva*.